

制度の政治思想史

-鹿子生浩輝『征服と自由：マキアヴェッリの政治思想とルネサンス・フィレンツェ』
（風行社、2013年）を読む-

世話人：石黒盛久（金沢大学）安武真隆（関西大学）

司会：安武真隆（関西大学）

報告者：村田玲（青山学院大学非常勤講師）石黒盛久（金沢大学）

討論者：鹿子生浩輝（九州女子大非常勤講師）犬塚元（東北大学）

*所属等は学会開催時のものである。

参加者数：15 名程度

近年のイタリア・ルネサンス政治思想研究の進展は著しい。その中でも本セッションでは、『マキアヴェッリとルネサンス国家：言説・祝祭・権力』（風行社）を 2009 年に公刊された石黒盛久会員の協力のもと、鹿子生浩輝氏の『征服と自由：マキアヴェッリの政治思想とルネサンス・フィレンツェ』（風行社、2013 年）に注目し、ルネサンス期フィレンツェ政治における共和主義と君主待望論との相克を検討した。この相克は、マキアヴェッリ政治思想研究においては、例えば、古代ローマ共和政を扱った『リウィウス論』ないし『ディスコルスィ』と、新君主を待望する『君主論』との間の整合性をめぐる問題としても長年理解されてきた。かかる論点について、石黒・鹿子生両氏は、ともにマキアヴェッリの政治思想と同時代の知的・制度的コンテクストとの連関に着目しながらも、極めて対照的な解釈を提示している点で、注目に値する。

本セッションでは、まず新進気鋭のマキアヴェッリ研究者である村田玲氏が、石黒氏の著作との比較において浮かび上がる鹿子生氏の著作の特徴を提示した。村田氏によれば、『征服と自由』は、マキアヴェッリの著作の政治的文脈として「フィレンツェ共和主義」を置き、その中でのメディチ家への助言として良き統治を要請する「長期的見通し」と、教皇領諸国の支配のための短期的見地とを区別する点にその特徴がある。対して石黒氏は、同時代フィレンツェを「市民的体制から絶対的体制」への移行期として捉え、独裁的権力を備えた君主の必要性を主張した思想家としてマキアヴェッリを理解する。さらに『君主論』と『リウィウス論』との間の「決して解けない問題」について両研究は、『君主論』第 9 章の「市民的君主政」に注目する点で共通している。しかし、この第 9 章の末尾の部分の解釈の違い故に、正反対のマキアヴェッリ像に帰着している。その相違は、『リウィウス論』の第一巻第 18 章の解釈にも看取され、そのことは後述のように、当時のフレンツェないしメディチ家

支配地域が直面していた課題の解釈の相違とも相関している、とする。

続いて石黒氏は、改めて自説の立場から、両著作におけるマキアヴェッリ政治思想の解釈の相違の鍵を握る『君主論』第9章と『リウィウス論』第一巻の解釈と同時代的歴史文脈の同定に踏み込む。石黒氏は、第9章の最後の部分の解釈として、市民的君主政の限界を指摘し、絶対的君主政へ転じることの必要性を説いているとする。この点で鹿子生氏はこの箇所を、市民的君主政から絶対君主政への意向を諫めるものと解釈している。さらに石黒氏は、絶対的権力をもつく立法者としてメディチ家が振る舞うことをマキアヴェッリが期待していたとし、その背景としてフィレンツェの腐敗が著しく、残虐非道な手段をとることすら肯定したとする見方を提示し、ここにマキアヴェッリの革新性を求めようとする。

さらに、デイヴィッド・ヒューム研究で知られる犬塚元氏は、鹿子生氏の著作を、伝統的マキアヴェッリ像の解体という面と同時に、その論証方法に対する自覚的態度の面でも、この10年間に公刊された最も重要な著作の一つとして評価する。その上で、「制度の政治思想史」という方法的観点からの評価として、制度か徳かという二項対立に還元されない、両者の組み合わせによって運命 Fortuna に対抗する図式を『征服と自由』のなかに看取する。続いて、同書で採用される論証方法として、テキストとコンテキストの対応関係についての擦り合わせの手続きが確認された上で、『君主論』が念頭に置いていた空間をフィレンツェの内部と外部に峻別する『征服と自由』の立論の論拠として、マキアヴェッリ自身の政体認識を窺わせるテキストが欠落している以上、状況証拠に留まる限界を示唆した。

続いて、著者の鹿子生氏から応答がなされた。確かに『リウィウス論』において、重篤な腐敗状態の場合に絶対的権力者による克服が想定されている箇所がある。しかし、フィレンツェに対する批判をマキアヴェッリは展開しているとは言え、ロンバルディアやナポリと比べて軽微な墮落状態にあるため、その記述を石黒氏が想定するように、フィレンツェに適用することは妥当ではない。さらにマキアヴェッリの政治思想の独創性について、従来言われてきた暴力性に求めることはできず、その限りで『征服と自由』は彼の独創性を低く評価するものである。加えて9章の「市民的君主政」については、石黒氏が絶対君主政への志向を読み取るのに対し、鹿子生氏は、あくまでも市民的体制の維持を前提とした立論と解釈する。トルコ型君主政についてもマキアヴェッリがモデルとしていたとは考えにくい。この他、フィレンツェの政体に対するマキアヴェッリ自身の認識については、1512年以降について資料が無く、『征服と自由』がこの点の論証について状況証拠に基づく推論に留まっているという犬塚氏の指摘は正しい。また自説の問題点として、マキアヴェッリ自身が『君主論』において国家を君主国と共和国とに分類し前者に考察を限定していると宣言していることと、『征服と自由』

がフィレンツェを共和主義の文脈の中に位置づけたこととの不整合が指摘された。

最後に、フロアからは、マキアヴェッリにとっての腐敗の特徴、さらに18世紀の反マキアヴェッリ論への影響、外交と内政との矛盾という視座の解釈上の妥当性、マキアヴェッリの同時代認識の正確性、暴力を中心とするマキアヴェッリに近代性を求める従来の政治学史・政治思想史の歴史叙述の見直しの是非、等、多岐に亘る論点が扱われた。

本セッションはまた、小田川大典、安武真隆らが中心に行なっている共同研究の一環でもある。昨年度のセッションでは、安藤裕介会員の『商業・専制・世論』を取り上げたが、今回もまた、近年公刊された政治制度をめぐる意欲的な単著を取りあげ、その合評会という形式を採用した。本セッションを通じて、制度をめぐる政治・社会的論点について問題意識の共有が図られるとともに、意見交換と討論の場が今後も継続されんことを願う。なお、本セッションに先立ち、2014年に関西大学の法学研究所主催で開催された学術シンポジウムでも、同趣旨の学術的検討を行う機会を設けたが、そのやり取りの一端は、政治思想学会のニューズレターの第40号（2015年7月）、関西大学法学研究所出版の『ノモス』第36号（2015年6月）にも紹介されている。合わせてご覧頂きたい。

http://www.jcspt.jp/publications/nl/040_201507.pdf

<http://www.kansai-u.ac.jp/ILS/publication/asset/nomos/36/nomos36-04.pdf>